

『天台教理の基礎的研究』概要

関口 中道

一、序

筆者は、平成二十三年、『天台教理の基礎的研究』と題して、学位請求論文（課程博士）を提出した。拙稿は、この論文の一部を掲載し、目的と内容を端的に示して概要を述べようとするものである。

この論文は、従来のように五時教判などの「教相」にこだわることなく、『維摩詰經三觀玄義』（以下、『三觀義』）により、三觀の理論を精査して天台の「教理」を再考することを目的としている。なぜ「教相」にこだわらず「教理」とするのか、まず、その理由を述べている序論を掲載して論文の目的を示す。

次に、「教理」を再考した一つの具体例として、『法華玄義』の三転読文について述べている第六章を掲載する。三觀と三転読文の関係は密であるが、『三觀義』を精査した上で三転読文の諸師釈を改めてみると、大宝守脱の解釈に独特なものが見出された。「教相」にこだわらずに再考した成果が多少なりとも現れていると考える。

論文の大部分は、『三觀義』による三觀の理論の精査が占めるのだが、拙稿では紙面の都合上その全容を示すことは困難である。しかし、以上の二つを掲載することにより、論文の目的と、僅かながら内容の性質程度は示しうると考える。三觀の理論については、拙稿末尾に補足的に概略を述べるのみとする。

二、『天台教理の基礎的研究』序論

まず本論文の題名を『天台教理の基礎的研究』とした経緯について述べたい。

「教理」という言葉の辞書的な意味は、例えば「法の道理なり。世尊の説法に於て、

『天台教理の基礎的研究』概要

実行的の訓戒と同時に四諦十二因縁八正道等の組織の教あり、是れ教理に属すべきものなり」、『經典に説く理論。一つの宗派の立てる教え。教義学の説くところ』となる。¹⁾

これによって「天台教理」という言葉を考えると、「天台の法の道理」、「天台宗の立てる教え」、「天台教義学の説くところ」ということになる。一論文の題名と考えると、天台教理としただけでは広範におよび掴み所がなく、あるいは、広範にわたって天台教学を説く概論書等にでも使われるべき性質の言葉である。また別言すれば、天台教学のどの部分を扱ったとしても教理という言葉の範疇を定めることはないのであるから、論文の特徴をあらわすためには極めて不適切な論題であるともいえよう。それにも関わらず敢えてこのような論題にした根拠は以下の通りである。

天台学においては「教理」に必ず勘案される言葉として、「教相」、「教判」などがあげられる。例えば「天台の教相教理」、「天台の教理教判」などと併設されて、同義語として用いられることも多い両者の言葉である。

これらの言葉に関しては、おもに昭和四十年代に学会で諸学者がおこなった天台の五時八教論に関する論議をあげる必要がある。ここで詳細を挙げることはしないが、五時八教の教判が天台の所立ではなく後世の学者によるものであるという意見をめぐり、その真偽がおよそ十年間、諸学者によって論議されたのである。²⁾五時八教の教判が天台所立であるということは、当時の天台教学においては普遍とされており、これを否定することは大変センセーショナルな意見であったであろう。したがって、後の天台教学においてもこの部分がとりだたされることが多いのであるが、本論文における筆者の関心は、五時八教の天台所立の真偽にはない。一連の論議に付随する「教相」、「教判」、「教理」という言葉に対する考え方である。

この論議に詳しい『天台教学の研究』から引用する。まず「教相」と「教判」について、

教相判釈を略して「教判」と言っているのが普通である。教判をまた「判教」ともいつている。同じくまた教相判釈を略して単に「教相」ということもあり、この場合、「教相」と「教判」とが全く同一の観念で扱われている。教相判釈とは、元来は釈尊一代の経教について、その説法の種々の様相を判別して解釈するという意味ではあるが、従来一般には、釈尊一代の経教、すなわち仏経の全般を、そのまま解釈し理解するというよりは、ある特定の教典またはある一宗派の宗義宗旨を全仏教内において位置づけ権威あらしめようとする目的が強く働いていたようである。³⁾

と、従来からの「教相」、「教判」の扱い方を述べる。

しかし、それに対して五時八教の一連の論議を踏まえてもう一度考えると、それはことなる次のような見方があるとしているのであるが、引用すると、

教相判釈とは、教相を判釈することで、分析的にいえば、教相についての「判釈」であり、そこには判釈の対象とされている意味での「教相」の概念が、まず先にあるはずである。このように区別して考えれば、その意味での教相という言葉と、「教相」と「判釈」との二言をあわせて省略した意味での「教判」という言葉とは、別個のものに考えられてよい。また「判釈」という言葉も、批判、判別などの意味の「判」と、解釈、釈義、などの意味の「釈」との、二個の概念に分けて考えると言うこともできる。「教判」という場合には各種の教相の勝劣の判別の概念が主となっていて、教相そのものがあるがままに忠実に解釈し理解しようとする「釈」の努力が失われ勝ちのようである。⁴⁾

とあり、従来のように「教相」と「教判」を同一の観念で用いるのではなく、別個のものと考え、更には、「教相判釈」の意味をもう一度とらえ直し、「教相」を理解する努力をするべきであるとしている。

そして次に、理解されるべき「教相」については、更に意見を進めて、

(五時八教の構成要素である) 藏・通・別・円の四教は、教判という範疇で論述されているのはもちろん適当ではないのみでなく、教相という概念で叙述される

べきものでもなく、それはむしろ「教理」または「教義」という概念において扱われるべきものであると考えられる。いまは、前に「教判」と「教相」の概念の差別について所見を述べたのにつづいて、さらに新たに「教相」と「教義」の概念の差別を考え、「教義」または「教理」と称せられるべきものの本質について考察し、現代の仏教研究としては、教判や教相の研究よりはさらに重要視されるべきものであることに思いをいたしたい。⁶⁾

といっている。化法の四教を例に挙げて、理解されるべき「教相」について更に考えると、それは「教義」もしくは「教理」という概念に置き換えるべきであるとしている。ここに本論の論題にある「教理」という言葉が見られるのである。

これまでの引用をもう一度、考察してまとめると、五時八教などの教相判釈などに「一宗派の宗義宗旨を全仏教内において位置づけ権威」づける等という目的があるとするならば、それを理解するということが、天台の教義そのものを理解するということがはまったく別のことである。また、教相判釈の目的が「位置づけや権威」づけにあるとしても、それを行うには批判や判別を行う前に、教相そのものに対する理解をしなければならず、それには、教相判釈を「教判」と単に約すのではなく、「釈」の意味に重点をおかねばならない。その場合は、理解される概念を「教相」とするのは充分ではなく、「教義」もしくは「教理」という言葉におきかえたほうが適当である。「教相」とした場合は、教相判釈を単に「教相」と約した場合などと混同しやすいという側面もある。

本論文の題名には、このような考えにしたがって「天台教理」という言葉を敢えて利用したのである。教相判釈などの言葉に左右されることなく、純粹に天台の教理について考え、理解したところを記すことを第一の目的としたい。もちろん、これまでにある五時八教に対する考え方に注意を払うことは必要不可欠であるが、それに主眼をおかないことにより見えてくる「教理」そのものを示したいのである。

ただし、当然のことではあるが、冒頭にも述べたように天台教理と題して、広範に及ぶ天台の教理を本論文で概説しようとするものではない。「基礎的研究」と論題に付した由縁であり、これには今後の研究活動の基礎を記すという意味もある。

本論文の輪郭と具体的な問題意識は以下の通りである。
まず、「天台教理」を理解するための前提として、『維摩詰経三観玄義』(以下、『三

観義』を読解することに努めた。『三観義』を底本に選んだ理由は、同じく『天台教理の研究』に、

かくて三大部には、いまさらに蔵・通・別・円、大・小、偏・円の差別内容などを問題にしていけないのであるが、しかもそれらについてすでに充分なる知識と理解をもつ者に対する立場で説かれており、随所に四教や三観の名が駆使されているから、四教三観についての十分な予備知識と素養がなければ、三大部は学び得ない。

などと、四教、三観についてまず理解することが、天台の教理を理解する上で重要である旨が言われているからである。これによれば、『大本四教義』など四教による理解を端緒にしてもいいのであるが、『三観義』を選んだのは、四教の場合、必ず「教判」の問題が絡んでくるのであり、筆者に五時八教の教判を基にした理解と混同してしまうのではという懸念があったからである。また、『三観義』を精査したと思われる先行研究の数も限られており、まずはこれを精査することを本論文の端緒とした。

その際には、『中大日本統感経』五五巻所収の『維摩詰経三観玄義二巻』を底本とし、本純撰『維摩詰経三観玄義籤録二巻』と、天明九年版『新刻浄名経三観玄義二巻』（東都書林）を参考とした。

後に詳しく述べるが、『三観義』は、晩年の天台大師智顛が「私は三論、成実、釈論、地論等の偏せるものより、禅によつて得た真の慧を受けた¹⁰⁾」等という晋王廣（後の隋の煬帝）の願いに応じて著述した天台維摩疏の一部である。この天台維摩疏のうち『三観義』は『維摩玄疏』の離出本といわれており、同じ離出本には他に『四教義』、『四悉壇義』がある。天台教学の骨格が教観二門にあるとするならば、『三観義』と『四教義』はまさしくその二門をさしており、そのうちの二門である『三観義』にあらわされる「偏りのない慧」とはいかなるものであるか。また『三観義』には「ただ浄名の名のみにあらず。一部の宗致を顕わし、文意炳然たり¹¹⁾」といわれている。一部の宗致である「三観」とはいかなるものであろうか。『三観義』を精査して、天台教理について理解したところを述べる。

註

(1)前者は『織田仏教大辞典』、後者は中村元著『仏教語大辞典』より引用。

『天台教理の基礎的研究』概要

(2)学会での一連の論議には、『天台教学の研究』関口真大編著(大東出版社)に詳しい。
(3)『同』六〇九頁。
(4)『同』六一二頁。

(5)ちなみに、例えば『織田仏教大辞典』などでも、「教判」について「所謂教観二門中の教相門なり」などと同一に扱われている。

(6)同(2)、六一三頁。括弧内、筆者。

(7)「教義」を用いなかっただのは、『同』六二七頁に、「現代においては、教義なる用語には、各宗の宗義を指す場合などの教義という用語と明確に区別しがたい点があるから、私は、むしろ「仏教教理」「仏教教理史」などの用語例にならって「教理」といったほうが、仏教に説かれる教義の思想内容を指す意味が明白になり、もつてひろく各般の経散に合まれる教義教理をひろく理解するための基礎的理解に資するものとなすべきであると考える。」とあるからである。

(8)『同』六二六頁。

(9)また、『同』六二四頁には、『維摩経』に対する理解を例に挙げ、『維摩経』の内容を理解するためには必然的に小乗、大乘の差別、権実偏円の教理についての充分なる予備知識を要する。その大小偏円の経教を、天台大師は蔵・通・別・円の四教に整頓したのである。しかもその四教のそれぞれの思想内容の基本を折空観、体空観、次第三観、一心三観と規定したのであるから、『四教義』は『三観義』とあいまってはじめて完璧となる。これが『四教義』と『三観義』とが『維摩玄義』においてならべて懇説されている所以である。四教も三観も天台大師による仏教教理の概論、または仏教思想の通論とも見るべき」という主張なども見られ、『天台教学の研究』においては、四教と三観に対する理解が重要である旨が散見できる。
(10)多田厚隆「高祖天台維摩部述作の年次」『山家学報』第一巻四号
(11)『三観義』新統感五五・六六九上。

三、『天台教理の基礎的研究』 三転読文について

第一節 問題の所在

三転読文は、十如三転ともいわれ『法華玄義』の五重玄義釈名の衆生法の解釈に示されることは周知のことであろう。『法華経』十如是の各々の句を是相如・如是相・

相如是、是性如・如是性・性如是などと三通りに転じて読み、それぞれに空諦、仮諦、中諦を配当させる天台独特の法の解釈であり、三観との関連は明らかである。

また、三転読文は『法華玄義』に「(妙の義を) 広く説くは、先に法、次に妙なり」とあるように、釈名において「妙」の義を詳しく示す前提として、まず衆生法が妙であることを端的に表意する重要な箇所であるので、三転読文は昨今まで各時代の諸学者によって様々に理解されてきた。

本論においては、ここまで、四不可説との関係を中心に三観について考察してきた。その過程において、諸学者の三転読文の解釈にもあたったのであるが、特に注目されたのは大宝守脱(以下、守脱)の三転読文解釈である。守脱の三転読文の解釈は、他の諸学者にない独特なものである。しかし、仮諦転について、従空入仮観でみた「自行の惑」または「塵沙の惑」という意味をあらわすのに優れていると考えられた。守脱の三転読文を中心に考察していく。

第二節 三転読文に対する三通りの解釈

まずは、諸学者の三転読文に対する解釈を整理したい。

今回、披見しえた限りの『法華玄義』の末疏等において、三転読文の諸学者の解釈を整理すると、それには、大きく分別すると三通りの系統があるようである。

まず一つは、大転、小転に着目した理解である。

後の二つについては、仮諦転の「如是相」の一字ずつの字義と読み下し方に、両者の相違が顕著にあらわれている。「如是相」のうち「如是」を指示の語として「如是相(是くの如き相)」とする読み方と、もう一方は「如」を即空・不異を意味する語「是」を系同の語として「如_レ是_{ナリ}相_{ナリ}(如は是れ相なり)」とする読み方である⁴⁾。繁雑であるので、もう一度整理すると、三転読文の諸学者の主要な理解には、

①大転、小転に着目した解釈

②仮諦転の「如是」の二字を指示の語とする解釈(是の如き相)

③仮諦転の「如」を即空・不異、是を系同の語とする解釈(如は是れ相なり)

の三通りがあるのである⁵⁾。

①の解釈は『法華経鷲林拾葉鈔』(以下、『鷲林鈔』)や『法華経直談抄』(以下、『直談抄』)

に見られる解釈である⁶⁾。これと②の解釈については、諸々の天台学の概説書等にも詳しいのでそれらを参照したい⁷⁾。つまりは、③の解釈が守脱の『法華玄義釋籤講述』(以下、『講述』)の解釈なのであるが、被見のうち、守脱のみが用いている独特なものである。また、これは②の解釈を否定する形で述べられている。それにも、その特異さがみえるのであるが、それを以下にそれを示す。

第三節 大宝守脱の三転読文の解釈

守脱は、三転それぞれについて次のように述べている。まず空諦転については、

初に是相如というは、是の字は指示の辞なり。相はいわく仮相なり。如は不異に名づく、即空の義(畢竟空義)なり。蓋し是の相即ち如なりと。故に是相如と云うなり⁸⁾。

として、是_レ指示、相_レ仮相、如_レ即空の義であると規定する。

続いて仮諦転に、

次に如是相というは、如は不異に名づく。畢竟空義なり。是の字は系同の辞なり。即の義を取る。相は謂わく仮相なり。蓋し如即ちこれ相なりと。故に如是相と云うなり。

随聞の二に、輒く如是の二字を訓して俱に指示の辞と為し、いわく「是の如き相」と云うは、忽ち次に空を点じて相性と云い、籤に約空論仮というに違ず。況んや仮を成ずといえども即の義を成ぜざるをや。偈の文に如是性相の義と云うが若きは、如是の二字は俱に指示の辞なり。然るに三転は本より義による。偈によつてこれを妨ぐべからず⁹⁾。

とある。如_レ不異、畢竟空義、相_レ仮相の二字について、空諦転の字義をそのまま引き継いで用いている。

②の解釈では、「如是」の二字を指示の語として、「是の如き相」とするのであるが、守脱はそのように解釈せずに、更にそれを否定するのである。玄門の『釋籤隨聞記』をあげ、右のように「籤に約空論仮というに違ず」等と「是の如き相」とする

②の解釈を否定している。¹¹⁾

「空に約す」というのはどういうことであろうか。『三觀義』に「菩薩は深く禪定に住し、空は空に非ずと知り仮を觀す」というように、必ず空をふまえた上での仮諦であるのだが、如₁空としないと、その意が踏まえられていないとされているのであろう。または、前二章でみたように、「自行の惑」を四句推検に空と考えて入仮とするのだが、その意味も、「是の如し」としたのでは踏まえられていないとされているのである。ここまで従空入仮觀を見てきたところによると、「如(空)は是れ相なり」としたほうが、より厳密なのである。また、守脱は更に、それらの意を顧みないで『法華經』の十如是さながらに「是の如き相」とただ読むのでは、天台のそれらの意義が一切含まれていないと付け加えている。

続いて、中諦転においても『釋籤隨聞記』に、辛辣な批判をくわえている。中諦転の解釈には、

次に相如是と云うは、相は仮相を云う。実相を指すに非ず。如は冥如を云う。空の義を取るに非ず。是は非に簡異す。直ちに実相に名づく。蓋し相は是に如すと。故に相如是と云う。¹²⁾

とあり、ここでは空諦転、仮諦転とは如とはと字義を改めて、今度は、如₁冥如、是₁実相の義であるとして「(仮)相は(中道実相の)是に如す」と読み下している。そして、

次に釈して中道実相の是に如すと云うが如きは、且く如是の二字を消す。總じて相如是の三字を解釈するには非ず。籤録の二の上に註して云く、諸法は中道実相の是に冥如すなりと。得たり。隨聞の二に相を実相と為し、如を称如と為し、是の字を訓じて法を指すの辞と為す。読んで相に如するのはなり。一笑するに堪えたり。相如是を訓じて如相是と為す。文字錯倒なり。況んや句末の是の字を訓じて指示の辞と為すをや。これ何をかいわんや。若し諸文の中、句末に是也の二字を用いれば、定んで指示の辞なり。¹³⁾

と、仮諦転と同様に、『釋籤隨聞記』に「一笑するに堪えたり」などと辛辣な批判を

加えている。確かに、『法華玄義』には、「もし如是相と作すは、中道実相の是に如す」¹⁴⁾と中諦転を説明していることからしても、玄門の相₁実相、等とする解釈は適當でないように推察できるのである。

また、仮諦転に戻れば、『法華玄義』には「如是相とは、空の相性を点じて名字の施設す。遷迤不同なり」¹⁵⁾とある。守脱のように、如₁空としなければ、「空の相性」とある「空」の意味があらわせない。先の「約空論仮」とあわせて、守脱の解釈は、より智顛や湛然の解釈に厳密に従っていると考える。

第四節 小結

以上のように守脱の三転読文の解釈を検討したのであるが、これは如とはと相の一字づつの意味を三転それぞれに変えており、それらを正確に捉えねばならない。『三觀義』と照らしあわせるならば、菩薩は一度、空をふまえてから仮を觀するという意味に忠実である。また智顛や灌頂の考え方により厳密な解釈であるといえるのである。煩雜であるので以下に表にまとめて小結とする。『三觀義』と照らしあわせるならば、菩薩は一度、空をふまえてから仮を觀するという意味に忠実である。また智顛や灌頂の考え方により厳密であると言える。

空諦転	是 ₁ 指示	相 ₁ 仮相	如 ₁ 空、不異	是 ₁ 相、如 ₁ ナリ (是の相は如なり)
仮諦転	如 ₁ 空、不異	是 ₁ 系同	相 ₁ 仮相	如 ₁ は是 ₁ 相ナリ (如は是れ相なり)
中諦転	相 ₁ 仮相	如 ₁ 冥如	是 ₁ 中道実相	相 ₁ 如 ₁ は是 ₁ (相は是に如す)

註

- (1) 『法華玄義』(大正三三・六九三中)
- (2) 『法華玄義』(大正三三・六九三上) 括弧内は筆者。
- (3) 本論において、披見しえた末疏、解説書等は以下の通りである。

湛然『法華玄義釋籤』(『仏教大系』法華玄義一) 以下『釋籤』
 證眞『法華玄義私記』(『仏教大系』法華玄義一)
 尊舜『法華經鷲林拾葉鈔』(臨川書店)

栄心『法華経直談抄』（臨川書店）

慧澄『法華玄義釋籤講義』（『仏教大系』法華玄義一）

守脱『法華玄義釋籤講述』（『仏教大系』法華玄義一）

福田堯穎『天台學概論』（文一出版）

多田厚隆『実相の哲学』（『講座仏教／大蔵出版』2 仏教の思想）

その他、簡単な概説のみに留めているもの等多々あるが、詳細に三転読文そのものを解釈しているもののみを参照とした。

(4) 即空、不異、系同、指示の語は守脱の『講述』によるものである。次章に詳しく論じる。

(5) 『実相の哲学』においては、この三つの系統を「この如是の訓み方を、「是くの如き相、是くの如き性、乃至本末究竟等」と読むのを仮諦点といい、相性等を立てて不同を肯定する仮諦の意義をあらわすものとする。……（中略）……是（ぜ）は非に対するもので二辺を離れた中道実相を意味するから、十はみな中諦であることをあらわす中諦点という（②）。これは十如是の文を一の円形に書き、如を起点として読んで仮をあらわし、是を起点として空諦をあらわし、相を起点として中諦をあらわして読んで同じである（①）。その他の読みかたもある（③）が、要は一文を三義に読んで一文が三諦を詮表するということにある、これを十如三転読と言っている。」（傍線、括弧内筆者）としている。

(6) 『鷲林鈔』、『直談鈔』には、それぞれ、
大転の三諦、小転の三諦と云う事これ在り。十如は始終相對して末の本末究竟より最初の如是の句に還つて之を読む。三諦理を成ずれば大転なり。十如に亘て各一如是に於て三諦を顕せば小転なり。謂ゆる如是相は仮諦、相如是は中道、是相如是空諦なり。又経文の儘に三諦の点読む事あり。是の如き相、如は相を是す、是の相を如す。此の如く一々の如是に於て各の三諦の点じるは小転の三諦と云うなり。『鷲林鈔』（臨川書店）四三五頁。

大転三諦、小転三諦と云う事有り。大転の三諦と云うは十如是の始終に亘て三諦の徳義を分別すなり。是れ即ち十如に亘て如と云うは空義なり。相性魅力等は

仮諦の義なり。是とは中道義なり。さて小転三諦と云うは一如是の内にて三諦点を読むなり。常の如く如是相、如是性等と読むは仮諦の点なり。さて是相如、是性如、是躰如と読むは空点なり。さて相如是、性如是、躰如是と読むは中道の点なり。此の如き十如是と云うは三諦不思議の功德なるが故に迷悟の根源、果徳の理本と称歎して法華の躰と成るなり。『直談鈔』（臨川書店）三三七頁。

とある。これについて『織田仏教語辞典』では、「又中諦の時は所謂諸法と読みて如是の二字を超へて相如_レ是性_ハ如_レ是_ニ等と読み最末の本末究竟等より最初の二字へ還つて本末究竟して是に如すと読むなり。之を大転と云ふ。之に対して小転とて一句の中に於て反へり読む法もあるなり、空の時には如_ニナリ_一是_レ相_ニ如_ニナリ_一是_レ性_ニ等と読み中の時は如_レ是_ニ相_レ如_レ是_ニ性_ニ等と読むなり、されど大転の方勝さるべし、此は十如是を輪にすれば自ら生ずる読み方にして真言の所謂字輪觀なり」等とある。また註(5)を参照。

(7) 概説書等のうち、仮諦転についてのみ引用する。『織田仏教大辞典』に「三転は一に如_レ是_ニ相_ニ如_レ是_ニ性_ニ等と読み、乃至如_レ是_ニ是_ニ本末究竟_ニ等_ニと読みて仮諦の義を顕はすなり、相性体力等の不同なるは仮諦なるが故なり」とあり、『天台學概論』（二二一頁）には「第二の転は「三云如_レ是_ニ相_ニ如_レ是_ニ性_ニ等と読み、之は諸法の差別不同を顕はす事なる故、仮諦の点と呼ぶ」等とある。これらは、いずれも如是の二字を指示の語とする解釈である。また、『鷲林鈔』には「又経文の儘に三諦の点読む事あり。是の如き相、如は相を是す、如是の相を如す。此の如く一々の如是に於て各の三諦の点じるは小転の三諦と云うなり」（四三五頁）とある。②の解釈については、これらを参考。

(8) 『講述』（『仏教大系』法華玄義一）五〇七頁。

(9) 『同』五〇七頁。

(10) 辞書類によると、玄門は安樂律の中興の祖といわれる。時代は下るが守脱が一時、安樂律にいたという経緯からも、随聞とは『釋籤隨聞記』をさすと考える。『洪谷目錄』には叡山文庫南溪藏に存とあるが未見。

(11) 『釋籤』五〇八頁に、「次に読相の中、仮に約するに、遷迤の言有りといえども、ただこれ空に約して仮を論ず」とある。これによれば、湛然は守脱の参考にされているのだから、守脱と同様に考えているのであろう。だとすると、これは守脱独特のものとも言い難い。しかし、中村元選集第2巻「シナ人の思惟方法」（春

秋社) 一二七頁には、三転読文と同じように古藏が中観論、観中論、論中観と三通りに転読することを指して、「シナの学者は、名称は概念を頭すものであるという道理をわすれているのである」「シナ人の訓詁癖、文章愛好」であるとしている。シナ人は、これらを当然のこととして受け入れているのであり、守脱が述べているのは、日本語への書き下し方の問題でもある。湛然はシナ人である。同様の考え方をしているといっても、やはり守脱は独特である。

(12) 『三観義』新統蔵五五・六七二中

(13) 『講述』(『仏教大系』法華玄義一) 五〇七頁。

『同』五〇七頁。

(15) 『法華玄義』大正三三・六九三中。

四、結にかえて

以上が、論文の目的と具体例である。

「三転読文について」の掲載は、『三観義』により三観の理論を精査したことが前提となっている。したがって、守脱の独特の解釈が智顛により厳密である根拠として、この掲載では、『三観義』の一部の用例のみが引用されている。より詳細には『三観義』等を参照されたい。

次に、論文の内容を説明する補足の意味を兼ねて、論文においてどのように三観の理論を精査したのか概略を述べて、拙稿の結にかえたい。

まず、三観と『涅槃経』の四不可説との関係に着目し、四不可説の句を用いて三観の理論を説明した。

また、三観には析仮入空観、体仮入空観、従空入仮観、中道第一義観の四つの観法があり、生生、生不生、不生生、不生不生と割り当てるのが従来である。しかし、智顛の所説には、不生生と生不生の二句が次第前後している場合が多々ある。なぜ前後するのか理由を述べた。更には『三観義』によると、析仮入空観の理論は生生の句では説明しえないことなどについて言及した。

次に、三観と四悉檀の関係に着目した。先の四つの観法は、世界、為人、対治、第一義と次第して割り当てられる。しかし、そのみならず各観法の理論が、さらに四悉檀の次第どおりに説明されていることなどを指摘した。例えば、析仮入空観の理論

は、法を微塵と設定し(世界)、それを観じた人心に断常の二辺見がある(為人)のだが、その対処方法は「分破空」と観することであり(対治)、結果として言語道断(第一義)となる、と四悉檀の次第どおりに述べられているのである。同様のことは、他の観法についても言えるのであるが、これは三観のいかなる観法を修しても第一義に至れる可能性があることを示していると考察した。

また、四不可説は「不可説」の根拠であり、四悉檀は「可説」の根拠であるが、同時に知恵と慈悲という側面も表しているであろうことを述べた。

以上が『天台教理の基礎的研究』の概要である。今後さらに論を進めて行きたいと考える。

関口中道氏 学位請求論文要旨 (課程博士)

『天台教理の基礎的研究』概要

『天台教理の基礎的研究』の要旨は、以下の通りである。

第一章では、『三観義』の成立した背景と、その構成について述べた。第一節では、『三観義』は、天台維摩疏の離本であり、「偏ることのない真の智慧を教えてほしい」という、随の煬帝の求めに応じて献上されたものであることなどを指摘した。また、第二項においては、『三観義』の構成について、天明九年版『新刻浄名経三観玄義二巻』(東都書林)にある科文を起こし、それにより『三観義』の構成を略説した。

第二章から第五章では、三観と『涅槃経』の四不可説との関係に着目し、四不可説の句を用いて三観の理論を説明した。

また、三観には析仮入空観、体仮入空観、従空入仮観、中道第一義観の四つの観法があり、生生、生不生、不生生、不生不生と割り当てるのが従来である。しかし、智顛の所説には、不生生と生不生の二句が次第前後している場合が多々あるが、なぜ前後するのか理由を述べた。

従来どおりの説示が見られる『涅槃経疏』等と、次第前後する『三観義』、『摩訶止観』の四不可説の解釈、『四教義』などと比較しながら考察すると、四不可説の句を用いて「能詮」について述べているか、「所詮」について述べているかで次第が前後するのである。化法の四教でいえば、「能詮の教」か、もしくは「所詮の理」について述べているかである。例えば、『四教義』に「三藏教は生滅四諦の理を詮じる」などとあるが、この場合、三藏教が「能詮の教」で、生滅の四諦が「所詮の理」である。「能詮の教」を四不可説で説明する場合、通教を生不生、別教を不生生とあらわし、各々の「所詮の理」を四不可説で説明する場合、通教は不生生、別教は生不生とあらわされるのである。

同様に、三観に関しても「能観の観(法)」と「所観の理」に分けられ、体仮入空観、従空入仮観について、生不生と不生生が次第前後する。以上を、三智や五眼などとおわせて図示すると次のようになる。

「三観」 「四教」 「三智」 「五眼」 「四種四諦」 「三諦偈」 「四不可説」
体仮入空観 通教 一切智 恵眼 無生の四諦 観因縁即空 不生生 生不生

従空入仮観 別教 道種智 法眼 無量の四諦 観因縁亦仮名 生不生 不生

(所詮の理) (能詮の教)

また、従来、析仮入空観は生生の句に対応されて考えられるが、析仮入空観の「所観の理」は、生生の句では説明することができない。生生を用いる場合、それは、「外の外道」、「仏法に附せる外道」、「仏法を学んで外道入る」など「化用の所」である機縁をあらわしていることを言及した。

また中道第一義観、一心三観について述べ、不可説、不可思議であらわされる智恵について考察した。それには同時に、可説、思議であらわされる慈悲の側面があり、四悉檀によって構成されていることを指摘した。

第六章では、ここまでの三観についての考察を反映させて、『法華玄義』の三転読文について考察した。三転読文の諸先学の解釈を整理すると四通りの解釈があることが確認された。大転小転に着目した解釈、仮諦転を「是の如き相」と読み下す解釈、仮諦転を「如は是れ相なり」とする解釈の四通りである。このうち「如は是れ相なり」とする解釈は守脱によるもので、この解釈は智顛や湛然の意図により厳密なものではないかと指摘した。

第七章と第八章では、可説、思議、慈悲の側面をあらわす四悉檀について考察した。まず『法華玄義』の四悉檀について略説し、『大智度論』と『法華玄義』の説相を比較検討して、智顛が、いかに慈悲の側面を重視して四悉檀を用いているかを述べた。

また、三観と四悉檀の関係に着目した。析仮入空観、体仮入空観、従空入仮観、中道第一義観の四つの観法は、世界、為人、対治、第一義と次第して割り当てられる。しかし、そのみならず各観法の理論が、さらに四悉檀の次第どおりに説明されていることを指摘した。例えば、析仮入空観の理論は、法を微塵と設定し(世界)、それを観じた人心に断常の二辺見がある(為人)のだが、その対処方法は「分破空」と観ずることであり(対治)、結果として言語道断(第一義)となる、と四悉檀の次第どおりに述べられている。他の観法についても同様のことと言えるのである。つまりは三観のいかなる観法を修しても第一義に至れる可能性を示していることなどを言及した。